

永井さんを憶う

これを帰国洋上の仁君にささぐ

加 本 生

ショウショウとして小雨そぼふる中を、永井さんはへうへうとして去った。それは1960年11月25日、野辺のおくりの日であった。

香煙ゆらぐ秋風は冷たく、雲足早い藤森の空は、暗々として集まる人々の心に沁るものがあった。

静かに静かに、足音もさせないで、「もうおれは神の御召しによって行くよ…」といった具合に、カルガルとして人生航路最後の旅に……。

しゆく然としておくる私共の心に、期せずして去来したものは、洋上の仁君の心情であった。

父と子は、いやそれは母と子も、夫婦、兄弟姉妹、何れにしても、肉親の永別の惜情は、無限の悲しみにつきる。

遙かに故郷のこと、今はなき父を偲んでデッキで涙をしぼる姿は、船あしののろさを恨むその心情は誰にも期せずして通ずるものがあった。

昇天した永井さんの魂も、いち早くセガレの姿を求めて洋上に飛来し、手を振って別れを惜しまれたことだろう。

私は生前の永井さんをよくは知らない、ただ私のうすい記憶と印象は、永井さんの県会議員時代、村夫子然たる風格の中にき然とした信念の人。それは年輪を経たバックボーンを和い風ぼうに包んだ姿であった。

若い時代に渡米し、刻苦して初志を貫き故国に錦を飾った。

そして絶望的な貧しい山村に、何とか光明をもたらすべく、凡ゆる努力を捧げた永井さん。晩年は、パツションを文化と産業開発に注ぎ、山をみどりに、みどりを乳にと……ユートピア建設のパイロットとして惜しみなく力と汗をしぼった。世の人は、権力をあてに、報酬を求めて、或いは名声や富をえがいてあえて事を構える者が多い。

永井さんは違う。てん然として、自己の意慾を神にあずけてふるさとの幸を願って自らをささげた。

その虚心、その意慾と努力は見事に結晶して蒜山ジャージー酪農の基盤と繁栄をもたらした。それが永井さんの政治家らしからぬ政治家の真の姿であった。

その労を認めた政府は、永井さんに黄じゆほう章を贈ってその功を讃えた。

これは極く一部私の知ってる限りの永井さん生前の顕彰を拾ったものである。

かの生涯は努力の集積であって、信念を貫ぬき、清れんにして俗塵に染まず、そして偉大なる穩徳と功績を残していった。

セガレ達よ、心してオヤジに続け、

この尊い遺志をついで精進することが何よりの手向けとなろう。

オヤジもホホエンで君達の姿をいつまでも見守っているだろう。

涙を拭いてお互いに、人の世の宿命と時代を意識し、まなじりを決して次代を背負わねばならない。

永井さん、今は幽明境を異にしたが、あなたが蒔いたタネは、スクスクと育ち、山深いへき村にも文化と幸福が訪れてきている。

そして、それは日を経、時代と共に一層飛躍し発展していくだろう。

あなたは栄光あるコースを選び、それを確かにバトンタッチしていった。

山深い二川から湖畔をめぐって温原くんだり、秋色濃い道すがら、私は静かに永井さんを追憶し、人生の無情と変てんをしみじみと想った。